



得籠 乙巳

仙蛙奇縁

四

~ 13
3101
4



女との見へ斯りける程の浦の壮伎門の韓衣姫が容色心心地
 感ひ萬般言る者多しといふも争ひ然る正事心と寄せ
 玉の音何方も強面の管待王の程の壮伎等ハ愈想ひ絶へ
 う白地の婿あると言入る瀬平の殆ど餘一具羽と竊の商議
 して姫君の對ひて言はるこの浦曲の壮伎等君の懸想一日方せ婿の
 めんと言者多し吾儕強て是と推辞むと浦人等尚怪んて尔々と
 縣守へ訴ふる計りごとし是れよて彼具竹の赫奕姫が故古あるひ刀
 腋刀小柄并何れも世に干るる刀劍の屬ひて婿引手小齋さん者
 あらふ夫とこそ女兒が婿養の定めといふまは一箇ぬはさ當る渠等が
 怨ととも二箇の家尊の君三芳野の郷で君の御言号めと取替
 玉ひる柳の枝の半月の小柄の主とも見ぎて知る便もあらうと

低言ゆを姫も打點頭て其由と兼諾ひ玉ひぬ斯り後ハ婿あると
 のののの皆云々と聞へたる程の浦人等も是と聞と齋しく猛の
 遠近を求めて刀腋刀目貫小柄割并の類ひ何れと急めあきりて
 齋らし來るといふも皆是容易の品やて是れと思ふ物も有右
 一日通教の瀬平の世の動靜を聞えと外へ出て家へ居らば吳羽
 韓衣姫の母堂飛鳥の前弟虎王が事えと左様右様思ひつはて
 按し煩ふ折しも俄ハ外面騒々爰るうくと動揺めく聲まるの両個
 ハ顔見合して宵すが折裏まら物の間より外面を窺ふ年の頃三十
 余ありと色黒く月代長く相貌極て醜悪やく一癖あるまき武士
 躬の皂蛇皮袴の申刻なるる小袖と著し麻の袴を引りけ朱
 鞘の兩刀を跨へり此武士は何等の人なりといふ日外より

此浦曲こしうらまの來りき。杜伎等たぎらうらの劍法けんぽうと教へて便着べんしやくとさると聞きこへ。茨城門いばらぎの平へいとりの武士ぶしの退糧たいりやうあり。それの從まごふ輩たぐひの弟子でしと呼よべる此浦曲こしうらまの無頼子むらいし。真河豚まがわぶたの寅とら六汐むつしほ最さいの鉄八てつぱち。初味はつみ真愚まご四郎しやうえんど。所ところふ名なうこの者ものども。樽肴たんげんの類るいを齋い。案内あんないもさく動どう下くだ々々々々とおのりて結納けつなとおがき品々しんしんと所狹ところせままで推おるゝて異口同音いこうどうおんの。今烏いまの黃道わうだう吉日きちじつ也なり。日來にちらい師しの望のぞの如ごとく婚姻こんいんとくの阿那あな那なとくと共侶きよの祝いわき。形相かたちの具羽ぐうのくも其意そのいと半はんの推おるゝ。故意こぎと一切心得いっせしんとくぬ。面色おもての門平かどへい等らうの對たいひ。你おんの去頃きこころより此浦邊こしうらまの來きま。村むらの杜伎たぎ等らうの武藝ぶげいと教へ玉たまふ御方ごほうは知しり侍さむらいれと未親いままく物言ものいうゝ。こともしる見みすひらさ。禮服らいふくと着まて結納けつなの品しんと携たづへ婚姻こんいんのめをよ一の。宜よろ否いな何事なにことありや。更さらの合点がてん行ゆむと詰つりさ。虎六こらく

鉄八等てつぱちらうの進出しんしゅつてより。抑おさ吾師ごし茨城門いばらぎの平へいの中華ちゅうわの孫兵そんべい臥ふ龍りゆうの叔しやくおま。近曾ちかぞ湊みなと川がはの陣じん没ぼつ。玉たまと聞き下くだ楠正くすの成なるぬ。頗た劣ららむ軍学ぐんがく劍術けんじゆつの達たつ。玉たまと聞き千里せんりの馬うまも伯樂はくらくの遇あひ。とやらん未名みな主ぬしの環會わんかい玉たまと。諸國しよこく武者ぶし修行しゆぎやうの。此浦曲こしうらまへ來き玉たまと吾門ごもん引ひとめて武藝ぶげいの片端かたはと。まねびゆる。乱らんとる代よの太平たいへいと絆こた変へんり。斯しかる辺土へんども。何なに時とき軍ぐんの起おこらんも。知しりぞ然しかある時ときの倘落たうらく武者ぶしでも來きり。捕とらめと。恩賞おんしょうふ如何いかも。出世しゅっせるさんも知しり。此王こしやうのめめる事ことを憑たもふ空腹くうぷと。いと。汗水流あせながく稽古けいこするも。他身たみと思おもふ身みと思おもふ合あ吾ご懲ちやうの。そ業ごふる。東とうのれ西せいのれ吾ご儕し等らう。今烏いま師しと倡しょう引ひ。そ大だいせ。故意こぎ々々々々爰こゝへ來きり。別事べつじも。斯しか文武ぶんぶの秀ひさ玉たまふ吾ご大だい

人も、喜の尋思の外とやらん。日外不圖と云ふ娘を、闕窺するの類、あつたれ玉のりうら其心根のいと惜しく、從來、你的家の令人、久く都々不給事、玉ひりと聞か吾々ごとき、船子漁者の不骨のめを婿の取玉のまじげきと、吾大人の氏も系圖も立派の武士孔子も時不遇と云ふ。今薄命をまじきと、發跡玉ふ日のりうらむや、枉て令娘の婿兼と思ふのりうら今日、僥倖結納持參の推著婿待女、鳩ゆの媒介も、倉門生の俺們も、他人雜むの水入らむ是非兼引て貫ひくと傍若無人の形勢、小只羽ハ心中の大怒り、這奴韓衣姫との事と察と斯う又知らざると、只姫の容儀、感ひて強て娶んと言のら折悪く、郎人太郎ぬら家、在さむ何れもせよ、絳世にそる。六借ると態と辞と和せりける。然る御方の見苦き、吾

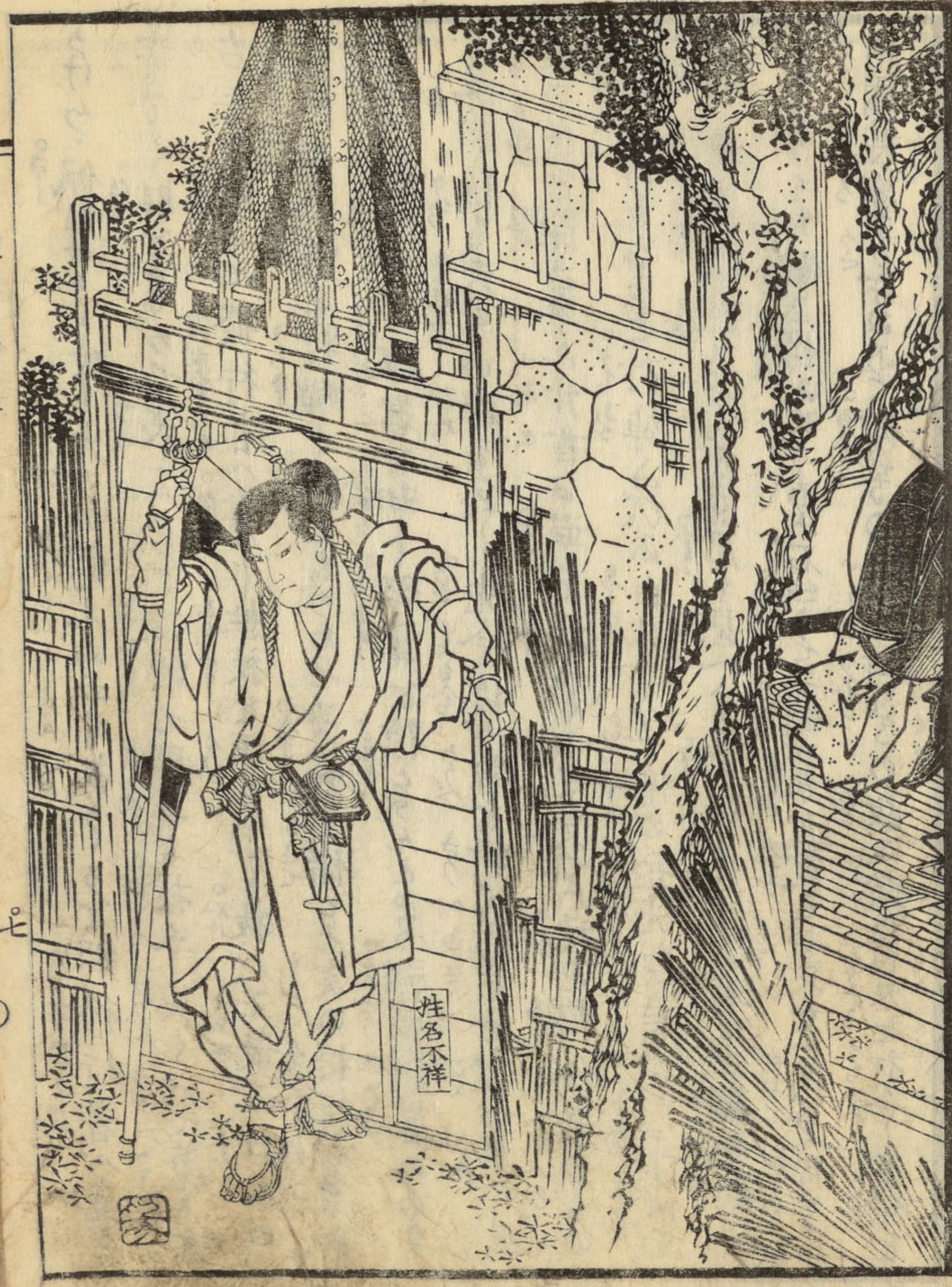
女兒を斯まむ。懇望一玉ひて斯る、荆柴陋宇へ駕を枉玉ふとの、冥加ああする仕合あり、然り豫て、你等ゆも、聞へさう、さうとる。不束なる娘を東や西と宣ひ、さるハ親の身、さりていと嬉しきの限るれど、彼方嫁らむと、這方恨む。這方を婿小取、彼方恨む。彼生田川の故事、さるで、竟ゆハ可憎娘を失はんも、計り難しと思ふのりうら。嗚呼、さうも、贖幣と望も、決恨のりうら。さうゆ。思ふ女夫、智恵袋とさき、下司のあとも、尋思、又漁師、船人の似げさ、力腕刀の類と望とも、思ひ、召玉、んが渠ハ原、至徳二年、乙丑の年の生さる。性ハ劍の金性、さるが、幼稚と記、或異人渠と相と、此、幼兒ハ劍の金性、さるが、世ハ稀、さる小柄、筭の、さる。平素ハ肌身を、放さむ、持さる時ハ、病もさる。運も開き、ゆ

身の上より長壽を保つる疑ひなくと示玉へ今彼是を
 思ひ廻らして家業似けらるる武器と望むるを、倘や門平
 ぬも此方小望の執幣とと言せし果を彼退糧のとよ夫の豫
 て門房等も聞かざる望の品の齋し、是齋と言ひて懐
 中より一ツの小柄を取つて見せし、是は奈何の物あると指
 寄て見る、豈圖らん先君直久公御最期の砌り遺言有し桃花
 と彫る小柄をありけし、心中大駭き、姫君と眼を見合は
 惘然として呆まそ、要時の言さるけり、姫君は偷眼先門平
 が人品を、御父君の物語と、雲泥の違るれと人目あは、問
 せむ甚麼せんや、裏く胸を、具羽の大方推し、門平等の對
 ひり、此小柄は世の中稀なる品なり、今日吾夫瀨平は家

小あつね、左右の返答も及がず、先這品の妾權く預り、夫が返
 り來ての後、東も西も相譚ひて、否哉の應と、まひとせんと言ふ、姫の
 流石の女子の、最も木訥き門平が形相を見て、奈何の英雄の
 と、斯る木訥人と妾が婿と情を、とあり、落る涙を推隠し、玉門
 人等、是を見て最早半の調ひ、阿那め、今中もあは、阿家翁
 瀨平の歸り給ひ、尔々のと告て、今宵は直の婚姻の祝酒、預
 らん、先寅六の齋する赤目の魚と、庖丁せよ、鉄八の竈の下を、林火つけよ
 ると立騒ぐ折、一個の六十六部笈を背負ひ、鉦打り、瀨平が菴
 の辺り、躊躇何思ひ、空と侍と、打眺望め、獨言て、吾
 儕儂、彼処の岳より、遙か此磯村と望み、怪しいる雲、似て雲、非
 志、烟の似て、烟のあはぬ、光氣、氣とて立登り、是正しく、妖氣

更と察して遙々爰小來て見るは妖氣ハ將此家の上小あり。情考ふ
 る此氣ハ是地上溼熱の蒸氣あり。大約氣のうち赤く外黄
 中て潤澤目と輝きあり。發する所の地の王者の起る事あり。是
 漢の高祖の沛公より一時平素居るる光氣あり。とるるは
 是なり。又龍の如く獸の如く旌旗如く弓弩の如きもの皆猛將の氣
 と是ハ彼頼光の四天王と聞へ坂田の公時が隱き。足柄山の嶺小
 とまびきとるる氣あり。地の祥氣あり。たへ上の徴有て青雲紫霧
 龍文高彩とるるもの。其下必聖賢英雄挺生あり。戦場の地
 宝玉の埋る所。皆光氣あり。是其下の氣ふらて徴と上の發するも
 のなり。今見る所の白氣ハ陰々層々として金氣と含する。正しく
 世に稀る刀劍或ハ明鏡の類ハ此家ハ秘有る疑ハ。幸此家ハ止

宿て見ゆ委細の容子を試さんと何う心小貞頭々柴門途く我ミより
 是ハこゝ六十六箇國の靈場毎ハ大衆妙典と納めんと。大願を
 起去より杖と曳錫を飛して諸國を徑廻る有髪沙門連大
 慈の心と一夜の止宿をめぐり。適々とおとるべ。那門平と
 弟子們ハ宜も得听ぶ首と打り。今宵這家ハ婚姻あり。家内も
 甚く混雜せり通り。又とちや言ふと修行者お返一否とよ
 吾侪最前より俄ハ持病ハ犯さきて今ハ一步も運びがうり。糞ハ柴
 小屋灰部屋の片隅も。はらまはし。臥さし。狂て一夜を明させぬ。こよ
 ろき好意心ハんと再び乞ひて。門平ハ忿まる声を。あう。あがり
 意聞分るき乞食。る。昏姻の。を。死。席へ最忌ハ。き。六十六部
 強て乞ま。欲。る。る。ハ。劍。の。牛。の。衰。命。の。法。赦。覺。悟。ひ。ら。げ。と。喚。び



姓名不祥

七



茨城推く
 韓衣姫小
 迫る

かろ衣

くま羽

あま

平

あま

うけつ、佩ひけらうせー大刀の鐔元四五寸抜くると那修行者ハ直と
寄るく、脇をきめて突まんと振解て門平が抜手尖く砍て蕙るを
右手ハ外して修行者ハ推力一柱杖を取らる一抜バ王散る白刃の
電門平吐嗟と打騒ぐ胸をきめて冷笑ひ儲こそ実の修行者るが
近來這辺りあり旅客を却一路費を掠とんとする強盗剥畧のあり
き。聞く你も夫等の群るぞ一先今你が首を斬て往來の客の爲も
後の患を除きまん开首な退そと研つくる受て返さ修行者の身の
裡銳きのとらむぞ打掉ふ白刃より一條の金光見き出て門平が眼を
遮り、漸刀法の乱まのとも危く見へる折しも立飯り来る主瀬平斯と
見るよりうち駄き傍ありゆふ石臼の二個が及を楚とむえ中へ俟り你等ハ
何國甚麼方なるよ何等の意赴何等の故ハ斯ハ白刃を打合して命を

的の戦ひ玉の先其縁故と告給へ吾儕ハ這家の主人世継瀬平と呼
る者なりといふ門平心づき扱ひ你があら瀬平ぬいあせしる吾
儕ハ去頃より此浦曲の來り杜伎等の劔法と教り茨城門平鬼
勝といふ武士の浪人なるが你が娘ハ懸想のあり門弟門を將て今
日ハもさきく來て婿あるん夏と議するの折柄とて修行者くる
混雜の中にも憚らむ一夜の舎りともあて譯と言ひて断とも聞入
とざる也此時宜ふ及ぶるなりといふ六部も聞て否とよ吾儕ハ高
もりる如く諸國と巡る修行者も持病のさす詮方り斯る
取込ありともあらば一夜の舎りともひいふこれる御浪人の辞荒く
宣ふのり。理不盡ハ吾儕と斬んと志玉の詮術り抜合して戦
ひるまで強て闘諍と好めるふあらば又假初ハも浮圖氏の流と

敵む身の似けり。柱杖の仕込。此の白及と最に怪しくももおのさんが。太平の代と緯り。乱世の斯深山幽谷のいとひる。旅々旅々日と送る行脚斗敷の境界をれ。猛獸盜賊の恐ろまるきや。ものらず非常とも。此の成刀必ず強盗剪徑りと思ひ違ひ玉ひと真心辞小頭ハを。瀨平ハ始終打聞て然ら。迷小仇も。恨もるまとあして。言々出合頭の喧嘩同前を先双方を白及とおのさんが玉ひ。何方の一個過ち有るとも。皆是我難義とるま。更りと理を尽。あて止めけら。二個の実もと打点頭定血氣の勇小とりて。まが羽の難義とる所小心のつらざり。小鈍まけ。双方と白及と引ん去來々々と共侶小白及といと門平修行者鞆と柱杖のおのの。韓衣兵羽ハ胸をあらう。始て安堵の思ひとるぬ當。

下瀨平ハ荆妻の對ひて。門平ぬとやらん。吾儕の望の婿贅とりて。玉ひとる奈何とる疾々見せとる兵羽心得て以前の小柄を出瀨平の速與せら瀨平ハ一目見るりもと駭き姫君兵羽と顔見合せ既小其緣故を問んとせが四下の人目を憚りけ。跡を怨々問諦むと肚裡小尋思ら。姫君の對ひ奈何も這小柄ハ摸様といひ彫といひ世稀る品と覺けら。這門平ぬと婿せら。休が情願の就ら時節もあづけま。まが今宵婚姻とる。臥簾の裡小得と此小柄の傳來とも聞れ。玉ひと夫とる。小言悟せ。漸く姫其心を推し。最面もあげぬ点頭ハ門第等ハ此爲体と見て瀨平ぬの美引玉ふら。娘御も得心と見れ。愈吾師の念願も遂げま。喜ばくま。今宵の定め。睦言私語思ひかれ。

てひのまは逆の美しけれ仲人の宵の程とらん。なほ黄昏の近し。返んと
 立上まが虎六聞て舌婚姻の還るといふ忌辞あり。吾儕等三個ハ
 開きとて言々修行者と疾視り。外面へ立出しか。何思ひん三個
 の迷小呷き合て裡手の方へ忍びりぬ。瀬平は斯も知れ再修行者ハ
 打對ひ幸ひ今日吾儕の家ゆり志を佛の忌日當りて今宵ハ吾
 家小宿り佛間に入りて夜と共に回向すと給れとの下心の最前の柱
 杖ゆきまゝ白双の因縁聞んと思へどそれともいざ引止られ修行
 者如渡得船の思へる。然らば主人の詞あまきか一夜の宿の御法赦ハ
 預りんと立上まが門平も等しく立上り父母の赦と受けられ少も
 早く床入して二個寐るを婚姻され。三々九度も入りのうらむ。娘
 の手を取まが。韓衣ハ其手とていひ父母のあま玉の望の品も

齋一玉ふまへの固辞むとありあまきと。餘り俄頃の事なりと言ひ。
 且最前你と修行者の白双と合て戦ひ玉ひるを親見するあまや
 胸の動氣ハまがまが何卒婚姻の度ハ。一夜二夜延と玉つる
 とも。還まふあまきと。門平ハ打微笑し。斯も締まらば言ふと。
 ると聞けむ。其の東も西も你が心まらるまが。最早你と我
 天天下晴ての女夫あり。縦や枕のうらむとも。一処小寄添ひて互の
 実を聞も。聞せも。程の事の妨あり。疾くる来り玉と。理も。韓
 衣姫と引らる。彼方の佛間此方の卧房。意と無常の二面。のまが
 入あける。

第七回

言語を設て韓衣門平を詰る
 素姓を明て正節往時を説く

韓衣姫の門平が爲の詮方々、房廊の裡の倡引と蒲團の下の座
 志まから、情思ひめぐるまら此浪人が進止家尊大人の物語と、遙の遠の
 て覚めり、其の主のあらざるが、然るも、這小柄の奈何や、持
 居るやらん、其詳るを問んと思ひ玉へど、是を委しく尋ねん、先妻
 が身の上と白地の告まら、叶ふや、鬼やせん角や想ひ躊躇しが、信と
 一ツの謀畧と生、門平の對ひ此小柄の、你奈何やと持玉へる、その
 縁故を審め告玉へと問られて、門平頭と搔き、來歴いと言んと
 て口籠る、あと半晌をり、漸く言や、這小柄の吾去る歳播
 摩の國靜が、屈の辺を、不意是を得たり、され、其傳來と詳を
 されども、思ふ、是名ざる、彫工の造り、物をうんうと、答あるを聞て、偕
 小柄の、實の父君の贈り玉る物なり、主の其人のあらざりけり。

尚其、実否と、糺と、つらと、再び、辞と、り、けて、り、く、倘や、此小柄の、漆する
 書物、へ、る、り、や、と、問、ふ、門平、と、答、ふ、當下、韓衣、姫、の、傍、で、隠、す
 持、る、懐、劍、を、抜、き、も、今、何、と、包、す、ん、妻、が、今、父、瀬、平、と、い、ふ、實
 の、家、臣、の、と、妻、が、又、四、年、以、前、西、國、の、お、ひ、て、人、の、打、死、し、る、折、を、
 帶、せ、刀、の、漆、する、小、柄、其、場、より、紛、失、察、ま、る、所、此、小、柄、を、靜、が、屈
 の、辺、を、得、たり、と、い、ふ、ら、ん、我、父、を、殺、し、奪、ひ、取、る、小、疑、ひ、を、尋
 常、の、勝負、せ、よ、と、詰、め、て、門平、の、慌、忙、ま、よ、待、玉、へ、必、を、聊、示、し
 玉、ひ、ぞ、我、全、く、人、を、殺、し、奪、ひ、取、る、物、の、お、ひ、て、你、倘、然、る、筋、の、孝
 子、ら、ん、ん、の、吾、儕、と、夫、婦、の、り、る、上、を、共、侶、の、敵、の、性、方、を、探、し
 助、太、刀、と、本、望、と、遂、ま、ま、る、此、事、若、偽、り、る、ら、ば、日、本、の、神、々、の、御、罰
 と、蒙、り、忽、此、所、の、お、ひ、て、血、を、吐、て、死、ま、ま、る、と、誓、言、を、する、と、見、て、韓

夜^よけきと和^やら^ん門^{かど}平^{へい}の打^{うち}對^{たい}ひ斯^しまを誓^{ちか}言^{げん}と立^た玉^{たま}ふら^んも偽^{いつはり}
 此^こ小^こ柄^{がら}の静^{しず}が嵐^{あらし}の辺^へを^{めぐ}り^ぬる故^ゆと^も君^{きみ}
 の御^{おん}手^て入^いり^しや尚^{なほ}詳^{しょう}の語^ごり玉^{たま}のこ^ごと問^とて門^{かど}平^{へい}打^{うち}点^{てん}頭^{とう}を
 其^{その}何^{なに}も易^{やす}き更^{さら}なり其^{その}小^こ柄^{がら}と得^えたる先^{まづ}年^{とし}播^は州^{しゅう}静^{しず}が嵐^{あらし}の辺^へ
 り小^こ遊^{あそ}折^おれ^しと言^いん^とま^る時^{とき}後^{のち}小^こ窺^{のぞ}ふ以^も前^{まへ}の修^{しゆ}行^{ぎやう}者^{しや}二^に人^{にん}が中^{ちゆう}
 へ^いり^し矢^や庭^{てい}の持^{もち}る小^こ柄^{がら}と奪^{うば}ひ燈^{とう}の下^{した}へ^いり^し寄^よせて右^{みぎ}視^し
 左^{ひだり}視^しの莞^{わん}尔^にと打^{うち}笑^{わら}と^も失^{うしな}へる吾^{わが}物^{もの}の將^{まさ}と相^あ違^{ちが}ひ^しら^んけ
 ず^し儲^{たくら}へ其^{その}夜^よの癖^{くせ}者^{しや}と告^つげ^りて吾^{わが}行^{ぎやう}先^{まへ}と止^{とど}ま^り汝^{なんぢ}も有^あり^けら
 や^や珍^{めづ}ら^しや吾^{わが}妻^{つま}亡^な父^{ちち}君^{きみ}の遺^い訓^{くん}と守^{まも}り^しも是^{これ}迄^{まで}操^{そう}と立^た顔^{かほ}も
 知^しら^ずる小^こ子^こと慕^{あこ}ふ心^{こころ}の深^あ実^{じつ}の今^{いま}宵^よぞ^もも^も閨^{かひ}の中^{ちゆう}の^{ちゆう}睦^{むつ}言^{げん}の
 以^も心^{こころ}傳^たへ^り他人^{たにん}の聞^きき事^{こと}も^もと足^あを^あて^り丁^{てい}と蹴^けと^も門^{かど}平^{へい}奮^{ふん}然^{ぜん}

と^とし^し念^{ねん}ふ得^え絶^たむ^ら俗^{じやく}の嚮^{きやう}の修^{しゆ}行^{ぎやう}者^{しや}も^も我^{わが}這^こ小^こ柄^{がら}と自^{おのれ}己^が物^{もの}と^し
 且^{かつ}這^こ婦^ふと吾^{わが}妻^{つま}も^もぐ^ぐへ不^ふ礼^{れい}の更^{さら}と言^いふ奴^{やつ}ら^ん本^{ほん}事^じへ豫^よて知^しり
 ず^ずん^んの尚^{なほ}懲^{ちやう}む^らぬ^ら及^{およ}向^{むか}ふ白^{はく}痴^ち先^{せん}息^{そく}の音^ねと止^{とど}めて吳^ごん^んと^と刀^{たう}と^とり^り
 立^たつ^つる^ると立^たせ^せも^もひ^ひ人^{にん}の修^{しゆ}行^{ぎやう}者^{しや}が頓^{とん}多^たの当^あ身^{しん}の門^{かど}平^{へい}ハ^ハ云^いふ^ふり^り息^{そく}
 絶^たえ^える^るの形^{かたち}容^{よう}の韓^{かん}衣^いハ^ハ駛^しき^きも^も由^{よし}断^たせ^せむ^む右^{みぎ}も^もり^りる^る懐^{くわい}劍^{けん}と身^みの
 引^ひつ^つけ^け鈍^{どん}る^る色^{いろ}も^も心^{こころ}得^えが^が辞^じの端^{たん}疾^{しやく}の仔^こ細^{さい}と譚^{たん}り^りと迫^{せま}
 問^とは^はま^まき^き完^{かん}余^よと^とも^も咲^さと^と吾^{わが}妹^い子^こ介^けの^の馳^ちき^きの^の心^{こころ}と^とお^おん^ん身^みが^が方^{かた}より^{より}問^とは
 ま^まど^ども^も言^いつ^つぐ^ぐ慥^{たつ}に^に這^こ身^{しん}の種^{しゆ}姓^{せい}仔^こ細^{さい}の^の譚^{たん}ら^らん^ん心^{こころ}と^とま^まが^がめ^めて^て听^きね^ねら^らし^し
 四^よ辺^{へん}と^と倍^{ばい}と^と眺^{なが}へ^へる^る一^{ひと}輝^かひ^ひる^る面^{めん}魂^{こん}ハ^ハ通^と一^{いつ}個^この^の英^{えい}雄^{ゆう}と^とお^おね^ねと^とあ^ある^る威^い威^い儀^ぎ
 堂^{どう}威^い風^{ふう}の^のさ^さを^をひ^ひける^る當^あ下^げ件^{けん}の^の修^{しゆ}行^{ぎやう}者^{しや}ハ^ハ小^こ膝^かを^を我^{わが}り^りて^て儲^{たくら}言^{げん}ふ^ふや^や他^た
 聞^きと^と憚^たる^る更^{さら}ふ^ふと^と既^{すで}ふ^ふし^し門^{かど}平^{へい}ハ^ハ我^{わが}堂^{どう}と^とり^りて^て問^と絶^たえ^える^ると^と他^たの^の淺^{せん}



環帶吳豕頭
門平
堅發難勇
時穿耳周高扇

正



知衣多
新人小水

桃柳の小柄暗お
宿縁と結がしむ

へさやうもな一余が意中を尽しん抑某が出生ハ播磨國曾根よりしと
 一里許ふりて孤村あり字を大日邨といふ這所ハ住ぬる漢父工鋸磨の
 吾作といふ者ありしとこが娘ハ夕浪を斯る鄙ハ稀なるべき容
 色の清るるを汝風ハ吹黒りんも可惜とも思ひけん二八の頃より京都へ
 登せ給事とらんませむしが去る康曆の乱より都ハ南北西朝と別ま
 合戦止時よりいふ那夕浪も故郷なる大日邨へ立寄りし何時より都ハ
 ありひる日奈何なる男ありてひけん故郷へ取りて後二三月と過る程ハ腹のちやう
 ぶくぶくと酢物好む形勢ハ全く臆壯と察りて密に兩親甚く駭き娘ハ同へと
 夕浪ハ只顔をとのぞ打赤らるる主と誰とも言出ねば吾作夫婦も今更ふ
 其主と問諱うとも益々きりて打相おたひ憐て十月ハ当ると産落せし
 吾侪より母ハ産後ハ果敢もなく消ても残る孤子と祖父祖母の介抱し則村の

字とてごり大日丸と呼びて貫乳をどく育が吾十三三の頃より
 農業漁獵の業を兼ひ自ら山野と欠れず猪猿と相人とてん
 武藝と訓練し或ハ辺り近き山寺ハ入て物讀し誰と師とまると
 いふもあらねど文武の道も大く明らるる加之吾幼稚より
 道と走る事ハ勝まるとを以て遠近の人ハ傭れて近國他國
 小往來する事數々ありけるが往時明德四の年ハ有りけん大
 和の國三芳野の里ハ用夏有て暫く逗留せし折より一夜あり
 さるる月ハ浮きて僑居と立出で書と携へて辺り近き觀音
 堂の欄干ハよとて心と清し獨兵書ハひもそく折柄一人の豪傑
 小子ハ對ひ吾ハ一人の娘あり你倘切成名遂て天下ハ知りて
 夏あらば夫婦となりて玉りて世ハ頼りき一言ハ奈何ゆもと

兼諾せしむ彼豪傑よりまびて桃花を彫る小柄を贈りて吾
彼桃の天々方々の詩の心をとんと早も察し佩る腋刀を付る
柳の半月を彫る小柄と通與しと

江南柳宛綵

尚愛枝葉陰

頻蒞黃鸝翼

暫堪待春深

と時の至ると待心と黃鸝の春と待の思ひをせる詩と書きて贈り
するゆを彼豪傑頻る吾文武の才と賞し再會の期と約して互ひ
名も名告らば別れ其後人の語らむ心秘めて年月を送るも
ゆの只我身の嬌奔野合の儲け兒も何人の胤といふ夏の知るるの
心苦く思ひが夫より十六の春初冠と得兵衛と名と改め大志
とつて賤業といふむもち祖父祖母も空くまりて亡人々の後世

と訪ふ爲と世の披露と斯六十六部の姿の打扮諸國と行脚の折
り播州静が嵐の詰でふ不思議や俄頃天地晦冥と恰も闇
夜の如く有り心驚き四下と見一人の老翁岩頭ふとむ
玉ひて吾とまゝ招き汝と待と既久し近く來とよと宣ふ小吾情
其老翁と見る小童顔鶴髪と其さる凡骨と是定め神
るんと思ひ近くよと公羽の前小蹲躑ま老翁何の示とすと
有て小子と召玉とと言し彼老翁吾小對ひ善哉々々汝の只
一条の匹夫鄙婦の吾作が孫との思ふべきと全く然らば実
南朝の忠臣楠正儀が落胤なりとと奈何といふ汝の母々浪都の
有り一日楠正儀ぬれ思はれて仮初の契り懐妊せし其後南
北の合戦の南朝に悉く敗走し終に正儀北帝へ降参せし深き思

慮あつての夏より不幸短命なり。黄泉の客となりて忠臣の血脉爰
 絶え。嗚呼実の孔明も死せむんば帝をんと唐土人の歎せり。是
 非もまき世のまきひり。然る夕浪もよと故郷へ歸りて後も你が種姓
 と色も隠せり。斯る名家の胤と生れ。碌々として生涯を草木と
 俱小朽果る夏より疾大義と思ひ立よ。汝幼稚より農業漁獵の活業と
 思ひ。武術と好む。文道小志とせねり。否といふも。父祖の血脉
 のまき。汝先年和易三芳野の里におかたて。半月の小柄を贈り。婚と
 約す。豪傑の此程因刃輪笠の城におかたて。陣没せし。足利直冬より
 我の汝と宿世の因縁淡く。且年來学ひ得る所の仙術と。是
 と知れり。汝今より彼直冬が娘韓衣が往方を探り。力とらて供侶
 小本意と達し。父祖の怨と清むべ。我僅学ぶ所の術と。りて。輪笠の

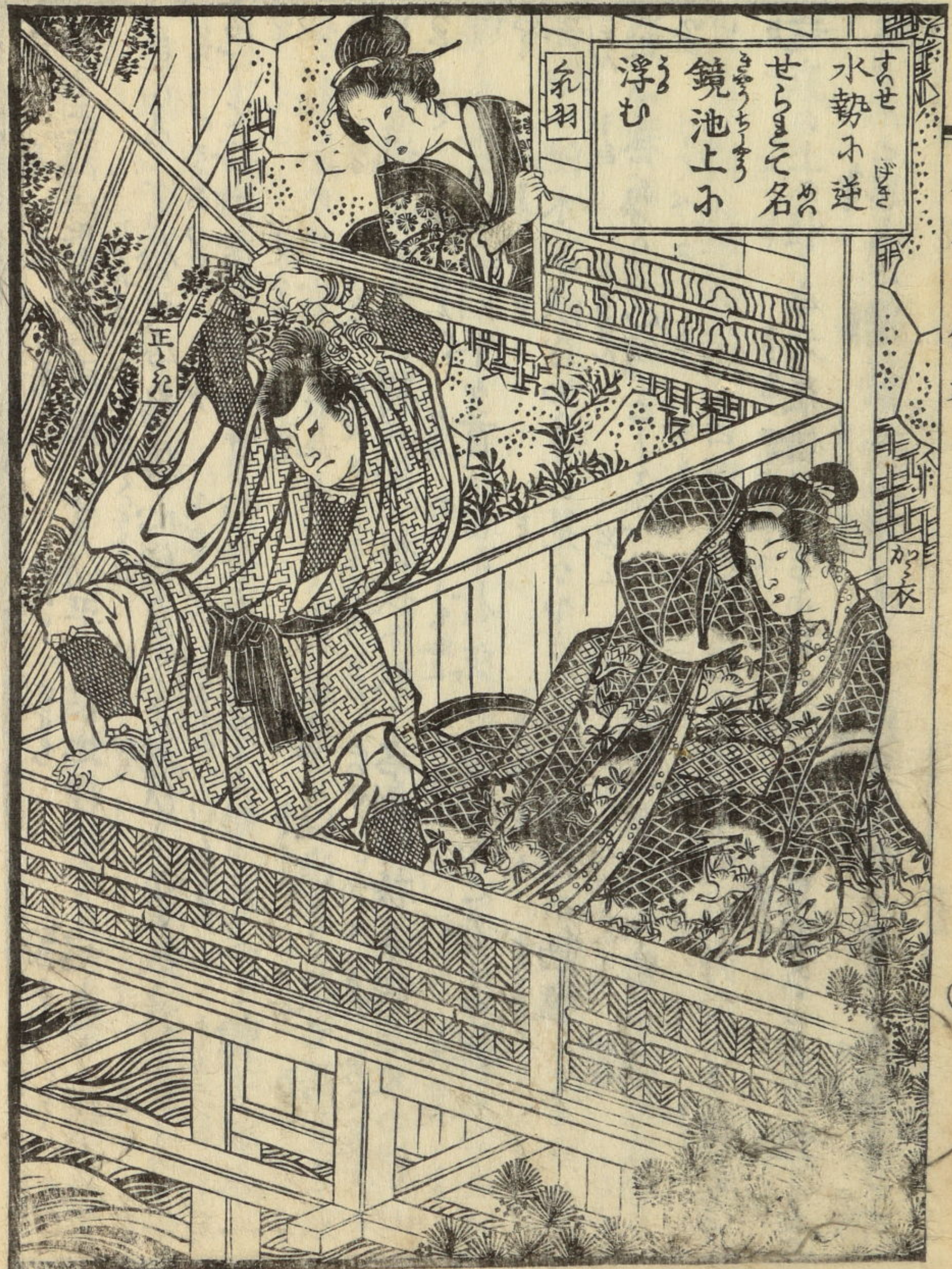
城落城の砌彼地に至り。雑兵小変形。紛れ入て直冬が帯せり。此の
 真武の劍と奪ひ來る。用ゆる所のあまはる。今去る汝の乾坤二
 卷の秘書と授くべし。懐より何やらん。卷物二軸と取出し。是は汝
 が先祖楠正成中華の孫武子より傳へる所の秘書なり。上天文
 地理より。下ハ軍法陳列のいり。千般萬般の妙術と識し。これ
 が大望と企る扶助と。んと。跡と彼真武の劍と天書二卷と。連與
 去。今一品の紅雀の鏡。直冬最期のとき。韓衣姫小與。今猶
 姫が肌身と。所持する。劍鏡と。合する時。いり。半
 月桃花の小柄も。おのづから。一処小集る。此上の卷小識せり。術頗る
 幻術小似たり。と。正路の夏より用る時。神通無量小。泰山小
 跨り。木子の中。身と。隠れ。然る。彼正成の千破劍の城。葉

人形とて軍兵と見せ敵を欺きしも全く此書の依る所なり。然りと
 此法と行んぬ世に稀なる名鏡と名劍と得て是は千足の蝦蟇の血
 汝と沃きさるて所持るまこと其の神通心の依るべし。汝つとて此書を
 熟讀して法の如くはるる素懐と遂げと。緯審小説示まこと一六我
 大さ小歡び終小口外せし夏さき三芳野の里の事まを知らるる感
 お彼劍と巻物と受たり。を老翁の素姓と問締んとせし老翁
 再びのうく。我の名ももく家ももく霞と吞霧と喰らひ以ももく母
 ももく不來不去の身の上るる後おのづから知る時ありと飄々
 然と袖を拂て山深く入り玉ひぬ爰おひて我情思ふ此
 老翁は是全く彼終る所と知らむと聞へ萬里の小路藤房卿
 るんると暫く其行方と伏拜し山を下んとも折柄豫て動靜と

窺ひ居りけん。木蔭より深編笠の面を包み朱鞘の長き両腰横と
 一處士めまきる一個の武士頭と我帯しる宝劍の小尻とて
 引えさんとまると我大さ小敬馬さ慌く其手と振拂ひ葛直の麓の方
 三足三足逃延ると癖者まこと声けらしは彼桃花の小柄と手裏
 劍の打て跡とくらす。逃去するが扱の其時の處士は是は門平と
 らんも有ける。我其頃よりと楠正節と名と改しむれど猶時の至
 らざるをさる。まきる六部の姿を諸國の地理とまきると此國來し
 るると一五一十と物語る。韓衣姫は是と聞て且驚き且歡び扱ひ亡父
 君の言辨し玉へ。我背とらふ誰有らん南朝の忠臣と聞へ楠殿の
 落胤大日丸ゆゑをを。斯あらんと思ひ更此門平が證據の小
 柄の痕跡とまき。其主ありあるまくと最前とて敵打らると締を儲て

ありせしる。斯環會まひるまき上る。世の便りまき妻と助け母の
 踪跡父の仇とてとてとてと言ひて守袋の紐とて取出したる證
 捷の小柄模様の柳の半月もつらん丸く望夜の天下とての妹と
 背と世の中廣く添てと頼む吾夫只一人不便と思ひ玉つとて
 恥く涙のなまらるる。短冊もつらん大日丸渡共取て右視左視紛
 りたる。短冊小柄もつらん。今月今日我手小還るも不思議の因縁
 父祖の敵のまらるる。舅の仇も足利一家赤松一族恨とて置く
 へきと齒とてひらり拳と握り無念の涙のなまらるる。韓衣の再び手箱の
 底とてひ探りて父の紀念の兵郡の綾の白旗と取り出し此一品の父が
 最期の砌妻の遺る家の旗も。是彼も君もまひるまきとて疾々
 大義と企玉ひて家の風と起。此旗と天が下ひるぐ。玉つとて。

厲まを辞這方め。虚死し。門平が忽地ひくと起直り疾より心ハ
 つきたまごも。你等が為体心得り。と思ひ。ゆゑ故意と死し。面
 色して仔細審み。所知り。叛逆人の直冬が娘と聞へ。韓衣姫今一
 個の楠家の残黨大日丸とつらん。這通り注進する候に居ると。駭
 出まを逃しも。立ど得兵衛が杖杖の杖。名剣と抜き。鋭き刃の電吐
 嗟と見る間。小門平が首と宙の打落。其浸とや。とらる。鮮血の庭の
 面。池水も。伏ぎかると見ら。やど。小天地俄頃。小動揺。水氣
 盛。小巻。ひらり。忽然と。一箇の名鏡。あつと。水勢も。逆は。れ。頭
 出ると。得兵衛が。信。白眼。完。尔。と。う。う。咲。我。這。所。へ。来。る。道。さ。か。ら
 這家の上。怪。光。氣。緒。ハ。迹。等。小。世。小。稀。る。へ。き。重。器。み。ン。ど。の。埋。の。ま
 り。ん。と。思。ふ。小。違。は。ぬ。此。名。鏡。と。ま。る。る。池。中。小。秘。め。り。り。察。ま。る。所。



小史言金卷本四

這鏡と直冬ぬの秘蔵せし紅雀とやうの名鏡なり。這鏡と
 の空劍との二品をい入るうありて名妖術も心のま意傾喜や
 嬉しやと傾心鏡をとり取る悦面小現をけり首尾を窺ふ文野の
 太郎吳羽侶俱小蔭を立出得兵衛が前小蹲踞思ふ勝る和君の
 おんうま正しく楠家の嫡流とす。韓衣姫の婿がぬふるとも争う恥
 うん嚮小和君と門平と戦ひのひし其折しも柱杖小仕込一刀を御
 家小傳る真武の劍と其時既小思ひしゆ糸絆を左右小假託て斯ハ
 止むまのうせし小其甲斐なりしと悦びる。其去る日弓が濱めと不意も姫
 君と前妻と小環會相將心家小飯くし。尚浦人の怪しうんと仮小娘と被露
 せし小壯校又姫うぬの美容うす小縣想しと誓ふうんとゆふ昔世の
 景稀なるべき刀劍或ハ小柄をんと誓引ひゆと望も言号せ。那刀你の往方

と知るよまがぬと夫婦が尽き誠心と神も哀と誓して。今日圖む
 君が爰小舎りを見り玉ふと全くと君直冬公の靈魂導き玉ふ
 るらん此上の今より我隱家小もまり玉ひ一刻も早く姫と婚姻と調
 ひ玉ひて疾々大望の御企然と具持りるとも言けし。正節頭を打
 揺て否々今日より爰小まき。韓衣と夫婦とあり。安閑と日を送らん
 と然るうと浦人韓衣小心と懸し我娶りて茲小住浦人恨と結ひ
 て竟小禍の端と曳出し。迷の爲小宜しく加旗門平とやらんをバ
 手小くけさまで。尚兩個の悪棍を放ち歸し。長く止らんま
 旁りりて然るうと最早劍鏡揃ふ人の静が嵐の老翁の教小從
 ひ千足の蝦蟇の血汐と取て此二品小も神通自在と得し。味
 方を集めて大義の企功成名遂。韓衣姫玉の輿めて迎へん必と

まどひつゝの心長ふ待玉へ支野夫婦姫が夏より頼むと言捨て心
強くも正節は立出んとする其處へ鶴の歸と見せて背戸の方小竊ひ
居て始終の動静を立聞たる寅六鉄八等が訴人ありて。這奴等と
先小立。縣守の親兵鎖帷子小手臈當の身を堅め各位の十手を
閃り瀨平が茅屋と十重廿重の小ち取巻声高まり此家の娘と云
ひの直久が娘の韓衣又怪しき修行者こそ。慥小楠が殘黨と訴人
有て明白あり。取早協ら尋常の名告て縛せうけよと。言動揺め
まどひつゝ入る小大日丸のありと見やり。呵々と笑ひ螻蛄を揚
げて車小向ふ汝等があるまひ絆ありや。可惜頭を失んより。疾道を開
ひて通まへと自若と一なる形勢小親兵等ハ大ま怒り。言とぬ這奴
が廣言するの打ととと敷圍て群々と競ひつゝを絆ともせむ。柱

杖を取て左右へ突のひえねのハ踏倒し入る所へ行如し此勢小解易
まて鉄八寅六始とく始おも似ぬ親兵の大勢風小散行く木の葉
の如くむくむくと逃散し。正節ハ此体を見て支野太郎を見返ると
奈何の通教最早我々身の上縣守へ聞へる上らら。你等も此所
の住居ごと。那里へるも權く身を隠し。我吉相を待ねり。さる疾々
と言の下小支野太郎の打点頭兵羽共侶精悍しく支度ら。姫が
手を取り。落行人とまる所へ取て返を親兵の黨をりトと支の往く
先と通教兵羽刀を抜て辛く切ぬけ落て行を追んと迫る兵等の
大日丸小支らと姿も見ざる。正節今ハ心安くと真武の劍
と真向あり。縦横無盡小斬散。悠々とそを落延ぬ。金示
得瓶 仙蛙奇録卷之四了

金示

